【2023 年度第 1 回研究会発表要旨】

自然写真の関係論：北海道における野生鳥獣の撮影現場を事例に

中村　香音

1. 本発表の目的

本発表の目的は、ティム・インゴルドによる「生命」に関する存在の関係論のアイデアから、野生鳥獣の撮影現場における関係性を再考することである。また、「撮る（＝人間）・撮られる（＝野生鳥獣）」の二者間による関係性にとらわれない自然写真のあり方の一アイデアを提案する。

2. 研究背景

現在、スマートフォンなどのデジタル機器の普及により、Instagram や Facebook などの SNS で多くの自然写真が出回るようになっている。北海道の各地でも、野生鳥獣の撮影のために多くの人が訪れている。その一方で、自然写真家の生の声や対面での証言に基づくリアルタイムの実証研究は進んでいない。大原尚之はこの課題を指摘し、自然写真家の撮影前の準備過程や撮影意図をインタビュー調査から明らかにした（Ohara 2019）。しかし、実際の自然写真の撮影現場がどのような様相であるのか、その中の関係性がどのようなものであるのかについてはあまり研究されていない。そこで発表者は、野生鳥獣の撮影を事例に、実際の撮影現場の調査を通してその中の関係性を考察することにした。

3. 事例報告

発表者は 2021 年から 2022 年にかけて、北海道の野生鳥獣の撮影が行われている現場においてフィードワークを行った。このフィールドワークでは、主に 2 人の撮影者の撮影に同行させてもらい、その撮影者と野生鳥獣がどのように出会い、どのように撮影を行っているのかを観察した。また、撮影者の経験を体感的に理解するため、発表者自身も現場の人々と同様に野生鳥獣の撮影を行った。今回はその中の 2 つの事例を取り上げる。2021 年 12 月 13 日に自然写真家の髙橋忠照氏に同行し、上富良野町・美瑛町付近の人気のない公園でエゾリスの撮影を行った。この時、エゾリスと髙橋氏と同じ現場にいた発表者の動きが、被写体（エゾリス）に影響を与えていたことを髙橋氏の指摘によって気づくことができた。写真撮影が、被写体（エゾリス）とそれを撮影する撮影者という二者間だけで完結するものではなく、その現場に関与する諸存在が絡まり合い、連動していることを確認した。また、2022 年 1 月 29 日にはアマチュアカメラマン X 氏の撮影に同行したが、このときの円山で出会ったクマゲラの撮影でも、撮影現場に関与する者たちの動作が複雑に絡まり合っていることを自ら撮影することを通して確認することができた。

4. 考察とまとめ

以上の調査を踏まえ、野生鳥獣の撮影における関係性をインゴルドのアイデアを用いて考察した。インゴルドは著書『生きていること』の中で、人間を含む有機体を動的な「跡」と表現し、さまざまな「跡」からなる一本の撚糸が一緒になることで生活世界の肌理を構

成しているという考え方を提唱している（インゴルド 2021）。この肌理は、有機体が関係論的場の内で構成されるという意味を表わし、編み合わされた線からなる場であることから、インゴルドはそれをネットワークではなく「メッシュワーク」と呼んでいる。ネットワークのイメージでは、要素そのものではなく、要素間のつながりに焦点が当てられ、つながれた要素の対は、その他方の形成過程に積極的な役割を果たすものとして認められる。このアイデアを写真撮影に当てはめると、「ネットワーク」からみた関係性は、関係の構成要素である人は野生鳥獣に対して「撮る」役割が認められ「撮影者」となり、野生鳥獣はその撮影者である人に対して「撮られる」役割が認められ「被写体」となる。しかし、「メッシュワーク」における関係性では、有機体や人間などの諸存在は常に生成し続ける動的な「跡」の絡まり合いで表され、「撮る・撮られる」という認識論的な関係性は浮かび上がってこない。

このように発表者は、インゴルドのアイデアを借りることで、「撮る・撮られる」という二項対立式的な関係性を捉え直すことができると考えた。この関係論は一見普遍的だが、写真撮影はその時々の条件や状況によって生起される事象は異なる。そして現場の調査からわかったことは、撮影現場に関与する諸存在は互いに連動し合っていたということであった。つまり、撮影現場における個別の関係性を把握する上では、撮影現場に関与する諸存在がどのように関係し合っているかだけでなく、どのように連動し合っているのかに目を向けることも重要だと考えられる。また、連動する諸存在は、撮影者とその被写体となる特定の野生鳥獣という二種だけでなく、カメラという無機質な存在や、気象、時間といった生物種以外も含まれる。それらの諸存在を関係性の視野に入れることで、より広い視野から写真撮影を捉え直すことが可能となる。以上から、撮影者・被写体という二者間の関係性だけを見て分析しても撮影現場の実態を把握することは難しく、むしろ広い意味での「自然」を視野に入れた自然写真のあり方を模索していく必要があることを提案したい。

参照文献

Ohara, Naoyuki
2019 Understanding Nature through Photography: An Empirical Analysis of the Intents of Nature Photographers and the Preparatory Process. Environmental Communication 13(8): 1053-1068.
インゴルド・ティム
2021 柴田崇・野中哲士・佐古仁志・原島大輔・青山慶・柳澤田実（訳）『生きていること 動く、知る、記述する』左右社.

（なかむら・かのん／北海道大学大学院文学院/博士後期課程）

民族誌からのデザイン発想

片 桐　尉 晶（保 昭）

本発表は、文化を使ってデザイン表現する方法の研究と提言であり、他の文化人類学研究のように答えを出したり、当事者への助言をするものではない。

従来の文化人類学では、個的な発想は近代科学でも文化人類学でも、主観的なものとされ、理論化されねばならぬものとされた。このような美は個的であるがゆえに、文化人類学においては、近代以前の「気づき」と肯定的に評価されたり、あるいは文化の範囲外とされたりと、デザインに参与するアクターたちのポジションによって弄ばれるという問題が生じている。

しかし、ヒトもまた動物である以上、発想は文化や科学の枠を超えて動物的・本能的にもなされ得るし、ワークショップなど合意形成の現場では、そこに文化の斉一性と個性の両立が求められるのも事実である。

そこでデザイナーは、文化を形態の発想にどう活用し、どう文化に添わせた形で形態としてまとめあげて行くべきかを、実際に民族誌を使って例示した。

この状況において民族誌をデザインへ利用する場合の留意点は以下にまとめられる。

・科学（文化人類学含む）は理論化によって、かえって表現の可能性を遠ざけてしまうこともある
・シンボル的な形が非理性的に配置されているのを「文化」と見なせる
・シンボル的な形と非理性的な配置を絵としてまとめるデザイナーの個性も、文化や科学の枠を超えた動物的・本能的行為として評価すべき
・理論化よりもこういった形態的な連想にしぼるのもひとつの手

その具体的方法として以下の手順を提言した。

i)　形をすべて挙げる→すべての形を平等にし、科学による過剰な意味付けを消去
ii)　位置関係を特定して配置→この段階で発想が湧いてくる、また発想しないとできない
iii)　メタファーとして表現すべきものを挙げる→デザイナーの感性と想像力を働かせるべき作業
iv)　施工可能な形態とする→自分の感性と想像力を働かせる
（　v)　全体をみて i）～iv）をチェックする）

完成するとデザイナー自身が思っても見なかったデザインが表現されることを事例から示した。

この方法の有効性を考察すると、

・理論化ではなく、理解以前に発想し、表現できる点で個々の独創が活用できる

・独創であっても、文化から連想されている点で、文化を表現したといえる
・完成された答えとしなくてもいい点でワークショップの出だしに使える
・説明しやすい点でクライアント、住民、当事者と合意形成しやすい

この方法において使いやすい民族誌とは、

・発想しやすく記述されていること
・発想しやすい解釈がなされていること
・発想しやすい考察がなされていること

であることを挙げた。

（かたぎり・やすあき／（有）風土計画舎）

アイヌ文化における怪談としての妖刀伝承
―抜き身の刀から人食刀まで―

山 中　芙 貴

1. はじめに

本報告はアイヌの民話のなかで妖刀イペタムが登場する説話を収集し、比較検討を加えた結果を報告したものである。アイヌ口承文芸の研究では、これまで研究のジャンル分類への偏重傾向が問題視されていた（中川 2020；馬場 2022）ことから、発表者は「イペタム」という説話の内容部分に焦点を当て、比較文学的な分析を試みた。

2. 説話の収集と分類

今回参照した妖刀イペタムに関する説話は、ユカラやウエペケレなど合わせて 19 編である。物語の舞台・採録地域は釧路・十勝・網走など道東部から石狩・空知地域にまで広範囲に及んだ。これらを説話中でイペタムがどのような存在として語られるかによって分類した場合、①宝刀・神の太刀など良い刀として語られるもの、②人を襲う、または襲う素振りを見せる人食刀として語られるもの、③トパットゥミ（野盗）撃退のため噂話として「人食刀が来るぞ」と語られるものの３種類に大別できた。③の野盗撃退型はそもそもipetam=人食刀という構図が成立していなくては語られないため、②と③には何らかの関係があると思われる。

3. イペタム説話の不思議

旭川市の資料によるとイペタム（ipe-tam）は「抜身の-刀」だったものが、言葉遊びによって「食べる-刀」に転じたものであるとされている。（旭川市 2018）「食べる-刀」の特徴を最も強く持つ②人食刀型の説話はウエペケレに分類される話型に多くみられたが、ウ

エペケレの特徴とされる「教訓」が見られず、また刀がなぜ人間を襲うのかという点について全く説明がなされていなかった。アイヌの民話においては人が空を飛んだり何度死んでも蘇ったりと不思議な出来事が多くあるが、イペタムのような「道理のない不思議」は珍しい。さらにこの不可思議な特徴は、②人食刀型でも③野盗撃退型でも見られた。

不気味で不思議な物語ながら、数々の類話が生まれる程語られ、鑑賞されている。このことから発表者は、人食刀型の説話は娯楽性の強い、和人文化で言うところの怪談のような物語として流行した説話だったのではないかと考えた。

4. アイヌと和人の「怪談」比較

本州の怪談文化の流行は江戸時代、つまり戦乱がなくなった平和な時代に「前代における穢土の観念の位置を怪異の現象が占める」（西田 2013）ことで起こったものであるという。庶民たちの間では、怪談をいかに恐ろしく語るかを競う「咄の点取り」と呼ばれる賭け事や、奇事異聞を披露しあう同好会などがあった。例えば滝沢馬琴は「兎園会」と呼ばれる同好会を主催していた。またその会誌には、程五郎という男が蛇を殺した数日後に病死した事件が記載されており、横川はこのエピソードを取り上げ、このような同好会が「程五郎の死因について因果関係の説明も教訓もなく、ただ不気味な話を持ち寄っていただけの状態」であったことを指摘している。（横川 1997）これは人食刀イペタムの説話で教訓が語られないことと共通した特徴であり、イペタムの説話も江戸の怪談のように、娯楽としての役割が大きい物語であった可能性を示している。また「咄の点取り」からは、「語りがうまい＝良い」というアイヌと似た価値観が和人にもあったことを読み取れるだろう。文字文化、口承文化という違いはあれど、「語り」に関しては共通する特徴も見られ、アイヌ－和人の文学の比較、及びジャンル分類を超えた比較文学的な内容分析の有用性は、一考の価値があると思われる。

5. 考察

イペタムは各話型で敵を斬る武器としての抜身の刀、得体の知れない化物としての人食刀、何も斬らない代わりにその名前だけで野盗を撃退する存在、３つの役割で語られていた。この役割の変容と「人食刀イペタム」の怪談に似た性質を和人の怪談文化と比較した場合、例えば怪談としての人食刀イペタムの説話は、アイヌ社会において武器での戦いがなくなった、言い換えれば和人による武装解除時のために戦いが奪われたなど、大きな事件を契機に生まれた説話である可能性も考えられる。

江戸で怪談が流行ったように、ある集団において特定の物語が流行する背景に歴史的な事実があるのだとすれば、アイヌの口承文芸からアイヌの歴史を知ろうとすることもできるはずである。これまでのジャンル分類に囚われずに純粋な「物語」としてアイヌの口承文芸を捉え直すことで、さらなる発見が期待できると考える。

引用文献

旭川市
2018　「第 19 回旭川市アイヌ語地名表記推進懇談会議事録」、旭川市.
中川裕
2020　『アイヌの物語世界』平凡社、東京.

西田耕三
2013 『怪異の入口 近世説話雑記』森話社、東京.
馬場祐美
2022 「アイヌ口承説話における「熊送り」の検討――「互酬性」の理解を目指して」『東北宗教学』(18):27-62、宮城.
横山泰子
1997 『江戸東京の怪談文化の成立と変遷』風間書房、東京.

（やまなか・ふき／会社員）

20 世紀前半の樺太先住民族のコレクション形成史における石田収蔵資料の位置づけについて

是 澤 櫻 子

1. はじめに

本発表の目的は、20 世紀初頭に樺太の先住民族の資料を収集した石田収蔵の日記、葉書資料に関する既存研究の整理と分析を通して、現地住民と収集者のあいだに生じた出来事を明らかにすることである。特に、収集者と所有者の出会いを仲介した「仲介者」の役割に注目し、コレクション形成史における石田資料の意義を論じることを目的とした。

2. 研究背景

日記や書簡資料に注目して、現地住民と収集者のあいだに生じた出来事や関係を論じる試みは、博物館関係者を中心に数多く行われてきた。1980 年代の海外のアイヌコレクションの悉皆調査（小谷編 2004）を背景とした出利葉らによる科学研究費助成事業は、収集者と所有者の出会いを仲介した人物として「エージェント」という概念を設定し、「社会・文化的背景を異にしてきた人びとが、どのように出会い、交渉し、互いの所有物や知識を譲渡し、あるいは交換しあったのか」という問いに取り組んできた（出利葉 2013）。本事業に基づく一連の研究の意義は、アイヌ資料の収集者と所有者という二項を中心に記述されてきたコレクション形成史に、仲介者という第三者の視点を導入し、その役割の検討を試みた点だったと言えよう。本研究もその流れを受け継ぎ、坪井正五郎の人類学教室の大学院生であった石田収蔵の資料を中心に、前述の三者関係における石田資料の意義を考察した。

3. 方法と資料

石田収蔵（1879－1940）は、1907 年に東京帝国大学の坪井正五郎の樺太調査に写真係として同行した調査をはじめ、生涯を通して計 5 回、樺太南部の調査を行った。数ヵ月ほど現地に滞在しながら野帳や写真機材による記録方法を駆使して今日のフィールドワークにつながる学術調査の黎明期を支えたが、まとまった成果を世に出す前に逝去したため、その功績が評価されはじめたのは近年のことであった。現在確認されている石田の資料は

数千点にのぼり、そのうち資料全体の概要や、葉書、写真、野帳等に関する研究が蓄積されてきた。本発表では、これら既存研究で翻刻・公開された資料を、前述の三者関係を軸に捉え直し再整理することを主な方法とした。また、石田資料の同時代的な意義を考えるため、同時代に北海道・樺太を調査した V. N. ヴァシーリエフの旅行記との比較を行った。

4. 石田収蔵資料について

石田資料の再整理を通して、２つのことが分かった。１つめは、1907 年に行われた１回目の調査が、行政と漁場のネットワークに基づいて行われていたことである。漁場ネットワークについては、小西（2000）が既に指摘しているが、本発表では、漁場を基盤とした先住民族政策のつながりに注目し、漁場と行政のネットワークの関連性について指摘した。例えば、石田資料には、敷香の稲垣敏夫から敷香庁管内の各免許漁場に送られた調査の便宜をはかる紹介状がある。本紹介状は、人類学調査をする石田のために、漁場で働くニヴフやウイルタの調査を便宜してほしいことを各漁場の代表者に依頼している。また、敷香出張所の職員などから毛皮製衣服、魚皮関係資料の購入やニヴフ、ウイルタに関する情報提供を趣旨とした葉書が送られており、石田が行政職員とのつながりをもとに資料収集をした様子が分かる。ゆえに、石田資料は、樺太庁の行政ネットワークをもとに集められた資料としての特徴を持つと考えられる。

次に、石田の野帳等の資料には、調査の案内役として、バフンケ、プニヨン、ボーコンなど、アイヌやニヴフの現地住民の名前が出てくる。前述の三者関係において、彼らは仲介者として位置づけられる人物である。例えば、石田が自分宛に調査の記録を記して送った葉書には、ニヴフのボーコン氏の夏の家を訪れた話やプニヨン氏と敷香で合流し調査を共にしたエピソード（どちらも 1917 年 8 月）などが綴られている。また、千徳太郎治氏やピウスツキの子息と馬車にのった話を記す葉書資料等もあった。このように、石田資料は当時の調査において現地の先住民族に案内を頼み、彼らと共に旅をしながら調査を進めていったことを伝えている。

5. 同時代の研究者との比較—V. N. ヴァシーリエフと石田収蔵

前述の仲介者たちは、調査においてどのような意味を持ったのだろうか。石田が調査中に出会った案内人のうち数名は、ブロニスワフ・ピウスツキや V. N. ヴァシーリエフのようなロシアを背景にもつ収集者も出会った人々であり、同時代の比較が可能である。そこで本発表では、ヴァシーリエフの旅行記をもとに三者関係を抽出し、石田資料との比較を試みた。

V. N. ヴァシーリエフは、ロシアとサハの出自をもつ民族学者である。ロシア政府の命により、1912 年の夏から秋にかけて、北海道、樺太アイヌの生活用具全般に関する資料を収集した。現在、ロシア民族学博物館を中心に約 2,500 点の資料が収蔵されている。ヴァシーリエフの旅行記をみると、当時の三者関係では、所有者による拒否や逃避、進んで売るという行為、仲介者による調査の制限や手助けなどの行為が見られることが分かった。特に儀礼に関する道具は、バフンケや葛西猛千代により収集が阻止されたことが詳細に記されている。このように、当時の資料収集では、仲介者は所有者の意向の確認や交渉をするだけではなく、資料収集の拒否や調査の管理を行うゲートキーパーのような存在で

あることがわかった。この点について、石田資料も仲介者の人物像について補完的な情報を含む史料として意義があると考えられる。

6. 結論

本発表の目的は、石田収蔵資料の再整理を通して、収集者、所有者、仲介者の三者間関係に基づくコレクション形成史における当該資料の意義を示すことであった。既存資料の捉え直しにより、和人、高学歴、男性という背景をもつ収集者である石田収蔵と仲介者らの多様な関係を描き出せる貴重な史料であることが分かった。今後、同時代の研究者との比較や、未翻刻の日記等の資料の分析を通して更にその詳細を明らかにすることが必要である。

引用文献

小谷凱宣（編）
2004　『海外のアイヌ文化財 現状と歴史』南山大学人類学研究所、名古屋.
小西雅徳（編）
2000　『石田収蔵 謎の人類学者の生涯と板橋』板橋区立郷土資料館、東京.
出利葉浩司（研究代表者）
2013　「科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書」（2023 年 7 月 21 日閲覧）
https://kaken.nii.ac.jp/ja/file/KAKENHI-PROJECT-21401047/21401047seika.pdf

（これさわ・さくらこ／国立アイヌ民族博物館）

「ウポポイにおける文化復興―展示資料の復元的製作」

北原モコットゥナシ・山道ムカラ・山田チケンキオ

アヌココロアイヌイコロマケンル（国立アイヌ民族博物館）の常設展示には、樺太アイヌがクマの霊送りの際にクマを繋いだ装飾的な杭、およびクマ用装飾を身に付けたヒグマのはく製が展示されている。これは、民族誌に記された情報や博物館資料の観察を経て復元的に製作されたたもので、アイヌ文化復興の要としてのウポポイを象徴する展示と言える。本発表では製作にあたって収集した情報の概要と、作業を通じて得た知見を報告する。

【本号「研究ノート」として掲載】

（きたはら・もこっとぅなし／北海道大学アイヌ・先住民研究センター）
（やまみち・むから／ウポポイ（民族共生象徴空間））
（やまだ・ちけんきお／ウポポイ（民族共生象徴空間））

オンラインレビューを用いた国立アイヌ民族博物館の常設展示評価

中村　尚弘

先住民族文化について国民を教育することは、博物館の果たすべき重要な役割の一つである。2020 年に開館したウポポイ・国立アイヌ民族博物館は、民族共生社会の実現に向けてアイヌ文化と歴史を国民に教育することを一つの目的とした日本初のアイヌ文化展示に特化した国立博物館である。しかし、開館直後から常設展示に関し、差別・苦難の歴史展示の不十分さや主体性の欠如などにおいて、専門家や活動家からやや否定的な評価を受けてきた。また、ソーシャルネットワーキングサイトでは、ヘイトスピーチの対象ともなってきた。しかし、一般来館者の展示評価や体験談調査・分析は、過去 3 年間、COVID-19 による行動上の制約などもあったことにより、まだ公にはなっていない。

したがって、本研究では、オンライン上のユーザーレビューを利用して、国立アイヌ民族博物館常設展示のアイヌ民族文化・歴史教育効果を分析することを目的とした。具体的には、開館後から 2022 年 11 月末までに Google にポストされたおよそ 300 の評価コメントの言説分析、Thematic coding を行い、来館したと思われる Google ユーザーが国立アイヌ民族博物館常設展示にたいしてどのような感想を抱いたのか、何を学んだのかをとらえようとした。

分析では、来館者は概して 国立アイヌ民族博物館常設展示に良い印象を抱いていることが示された。特に、アイヌ文化やアイヌの歴史についてはレビューの中で文化や歴史に関して言及したユーザーのほとんどが「アイヌ文化がよくわかった」「アイヌのすべてがわかる」などのコメントを残している。しかし、展示の質に関しては、一部のユーザーが好意的な評価をしているにもかかわらず、不満な点を挙げている。その例としては、専門家や活動家が指摘しているようなアイヌの苦難の歴史に関する詳細な情報が不足していることがあげられる。そして、現代のアイヌ文化の展示、および複製品を展示に含めることには賛否両論が見られた。「未来を感じさせる」と肯定的なコメントをするユーザーがいる一方で、「複製品ではアイヌが先住していたことの証拠にならず、ヘイトスピーチを増長させる」と懸念を示すユーザーもいた。

いずれにしても、オンラインレビューでは多くのユーザーが好意的な評価をし、よい学習経験をしたと述べていることから、国立アイヌ民族博物館の教育機関としての役割はある程度果たされているといえる。しかし、現時点ではその効果は来館者のみに限定されており、民族共生社会の実現に向けてアイヌ文化と歴史を国民に教育するという大きな目的をどのように達成していくのかは、まだ課題である。

本発表の内容は、以下に出版された。

Naohiro Nakamura & Yuko Osakada

2023　Examining the effectiveness of the educational role of the permanent exhibition at the National Ainu Museum, Japan, using online user generated review. Diaspora, Indigenous, and Minority Education, DOI: 10.1080/15595692.2023.2298859

（なかむら・なおひろ／南太平洋大学）

【2023 年度第 2 回研究会要旨】

アイヌ語地名「十勝」の由来

落 合 い ず み

まずアイヌ祖語における「川」の祖形を再建する。アイヌ語において「川」を表す語は pet であるが、この語を含むアイヌ語借用地名（アイヌ語の地名が日本語に借用されたもの）において、pet は「別」「瞥」「鼈」「辺地」「米地」「比遅」（以上音読）「淵」「土」（以上訓読）という漢字表記で出現する。これら表記のうち、ヴォヴィン（2008）によると「比遅」と「土」いう表記は『肥前風土記』に記録されている現在の長崎県にあったアイヌ語借用地名に含まれる。それ以外の表記は北海道と北奥に亘る地域で見られる。これら表記のうち訓読の 2 つ「淵」「土」と音読で漢字二文字の「辺地」「米地」「比遅」について、古代日本語により音韻解釈した場合、語の構造として 2 音節から成り、語末母音は i である。また、残りの 3 つの表記「別」「瞥」「鼈」は音読で漢字一文字であるが、これらの漢字音が漢音よりも早くに導入された呉音であったら、ベチ、ヘチ、ヘチとなり語末に母音 i を持つ。アイヌ語の「川」を表す 8 つの漢字表記すべてにおいて、借用された形式は 2 音節から成り語末母音が i であることを示す。以上は古代日本語に借用された古代アイヌ語から、古代アイヌ語の音を推定する試みである。その一方でアイヌ語内部において内的再建の証拠も得られる。「漁場」を表す peci-iwor とその自由交替形 pec-iwor という複合語があるが、前者にはアイヌ祖形 peci（< *peti）が化石的に保存されていると考えられる。また、鵡川方面には moypeci という日本語に借用されるに至らなかったアイヌ語本来地名が見られるが、後半の peci は「川」の古形を保存しているものだろう。これらを根拠に本発表ではアイヌ祖語における「川」を*peti と再建する。Janhunen（2020）と Ochiai（2023）によるとアイヌ語は歴史的に語末母音が脱落したと言われており、*peti「川」もその類に含まれ、語末母音 i が脱落することで pet に変化した。

次に、アイヌ祖語として再建した*peti「川」を手がかりとして、これまで「乳」を表すなどと言われてきたが、定説のなかったアイヌ語借用地名「十勝」を解く。これはアイヌ語本来地名では tokapci であるが、to ka peti（沼・ほとり・川）に遡ると考えられる。十勝川のほとりにあった大きな沼であるキムントー（kim un to）がその河川名の由来であろう。前半部分の to ka について、附近に「十日川」という河川名見られ、青森県と秋田県にもそれぞれ「斗賀」「戸賀」という地名が見られる。アイヌ語本来地名 tokapci の後半部分 pci は「川」の peti に由来する。子音 t が口蓋化し c になり、peci からさらに母音 e が脱落して pci に変わったのだろう。語源が不明になった後に、to ka pci は、tokap ci という分節で解釈されるようになったのだろう。前半の tokap は「乳」の意味があり、民間語源として「乳」を表すと考えられるようになった。現在では十勝地方全域を指す「十勝」という地名は、本来は沼のほとりの川というようにそれ自体で現在の十勝川を指す河川名であった。十勝川という表現はアイヌ語借用地名としての pci「川」と日本語の「川」の二つの「川」を表す語を含んでいることになる。そして地名であるという特殊性の故に、moypeci という地名において「川」の古形である*peti の語末母音が化石的に保存されているように、アイヌ語借用地名「十勝」の基であるアイヌ語本来地名 to ka pci においても

*peti の語末母音が化石的に保存されている。

引用文献

Janhunen, Juha A.

2020 Ainu Internal Reconstruction: on the Origin and Typological Context of the Affiliative Form. International Journal of Eurasian Linguistics 2(2): 181–209.

Ochiai, Izumi

2023 A disparity in the final vowels in Ainu: Word-final CV and CCV. Phonological Externalization 8: 41-60.

ヴォヴィン・アレキサンダー

2008 『萬葉集と風土記に見られる不思議な言葉と上代日本列島に於けるアイヌ語の分布』国際日本文化研究センター、京都.

（おちあい・いずみ／帯広畜産大学）

環境講座のエスノグラフィー
―公・民講座の比較から自治体ロジックモデルを改善する試み―

元 広　修 爾

1. はじめに

本報告では、自治体職場と NPO 現場を往還した経験を踏まえて、自治体担当者の立場から実務課題の解決策を検討する。環境講座におけるひと−モノの関係に着目し、NPO 講座の強みに現場の内側で学びながら、今後の自治体講座の改善ポイントを考察した。解決すべき実務課題は、学びの一過性、エコ行動の一過性、波及効果の一過性である。自治体担当者として、実務課題の問題解決を通して地域社会に「応答」（清水 2014）したい。

2. 調査概要

調査目的は、自治体・NPO の環境講座に参与し、差異と類似に着目した特性比較から、自治体講座のロジックモデルを改善することである。調査は 2017 年から 2023 年にかけて、合計 157 回にわたり実施し、両講座において参与観察を行った。多様な参加者が見られた。

調査場所は、広島県内の自然環境である。調査講座は、自ら担当した自治体講座と、協働関係にある NPO 講座である。調査対象は、環境講座におけるひと−モノの関係性である。

3. 自治体講座のロジックモデル

平成 10 年に中央環境審議会企画政策部会の環境教育小委員会において、環境教育・環境学習の基本的な方向が示されている。自治体講座のロジックモデルはその内容に沿ったものである。地域の人々の環境への関心を喚起して理解を促進し、環境保全に参加する態度・問題解決能力を育成することが目標とされる。これにより地域の各主体を環境配慮行動に導き、ライフスタイルの変革を図るものであるが、三つの実務課題が生まれている。

4. 学びの一過性という実務課題を考える

自治体講座においては、暮らしと環境のつながりについて参加者に正しい知識を教えることに重点が置かれる。ところが、NPO 講座の参加者を観察していると、環境保全の知識そのものを得ることに注力している人は見られず、自分が実際にやってみた「こと」や自分と周囲のひと・モノとの実際の「かかわり」を熱心に語る人が見られる。学びの対象が 自治体講座と NPO 講座で異なっていることに興味を抱いた。ある日、NPO 講座において 西中国山地・雲月山の山焼きをめぐるひと・モノのかかわりを教わった。そこで「コト的知識」（鈴木 2022）に出会った。地元在住の講師は、私に里山保全における山焼きの意義を伝えようとされながら、同時に里山の一つ一つのモノとご自身のかかわりを語り、山焼きをめぐる地域の対称的な関係性を私と分有した。印象的で忘れ得ぬ語りであった。

5. エコ行動の一過性という実務課題を考える

自治体講座においては、講座の学びを参加者のエコ行動につなげることに重点が置かれる。このため、プレゼントのような有形のモノや、伴走支援のような無形のモノが活用されている。ところが、NPO 講座の参加者を観察していると、モノを欲しがっているような人は見られず、モノを教えてくださいと言う参加者も見られない。NPO 講座の植物観察会に参与してみると、モノとの相互応答的な学び（原 1979（2023））が行われていることが私自身の学びを通して実感された。参加者が講師と植物との交流状況（例：種の識別）をよく観察して、自分でやってみて、修正しながら自学で、その交流状況を再現していくような学びである。はまり込むような面白さが参加者の行動の持続につながっていた。

6. 波及効果の一過性という実務課題を考える

自治体講座においては、モデル的な一点の学びの効果が実際の参加者を超えて地域に波紋のように広がるという作用や、好事例とされた学びが他の地域でも模倣され、その効果が地域を超えて広がるという作用が想定されている。ところが、NPO 講座の参加者を観察していると、モデル的な学びに憧れたり、他人の学びの模倣をするような人は見られない。偶然に身近な人から誘われて「おのずから」参加したと語る人が顕著に見られる。NPO 講座の参加者を観察していると、「ひとりでに」というあり方が様々に立ち現れる。海ごみ講座は、親子で参加しやすい講座の一つである。母親と幼い子どもの間で、子どもが海ごみをめぐる素朴な質問を発し、母親が子ども目線で分かりやすく解説するという場面が見られた。海ごみ–母親–幼い子どもという対称的な関係が、ひとりでに生まれることで、小さな作用ではあるが、講座の学びが着実に地域に広がっていることに気付かされた。

7. おわりに

NPO 講座の賑いの秘訣を知りたいと考えていた。NPO 講座で学んだことは、①コト的知識、②モノとの相互応答的な学び、③ひとりでに、を見守ることであった。今後の課題としては、これらのポイントを踏まえ、行政実務的な有用性を超えて、ひと–モノの関係性を深く広く考え直すための生の技法としての環境学習（今村 2012）を目指していきたい。

引用文献
今村光章
2012　「詩的に大地に住まうこと」井上有一・今村光章（編）『環境教育学：社会的公正と存在の豊かさを求めて』法律文化社、東京、1-10.
鈴木宏昭
2022　『私たちはどう学んでいるのか：創発から見る認知の変化』筑摩書房、東京.
清水展
2014　「応答する人類学」山下普司（編）『公共人類学』東京大学出版会、東京、19-36.
原ひろ子
2023　『子どもの文化人類学』筑摩書房、東京.

（もとひろ・しゅうじ／北海道大学大学院文学院）

17 世紀蝦夷地に漂着した朝鮮人関連記録の成立
―松前藩の記録を中心に―

シ ン　ウ ォ ン ジ

1696 年礼文島に 8 人の朝鮮人が漂着した。彼らは宗谷に渡り、南下の途中に和人と出会い、松前藩や幕府により松前、江戸、対馬等を経由して翌年送還された。本件に関する松前藩の記録として『漂流朝鮮人李先達呈辞』や『福山秘府』、『松前家記』が伝わっており、これらは現存しない『朝鮮人漂着部』を基に各々目的に合わせ抜粋した記録である可能性がある。本発表では、松前藩の各記録の位置づけを行い、『朝鮮人漂着部』の内容を推定する。

【本号「論文」として掲載】

（しん・うぉんじ／国立アイヌ民族博物館アソシエイトフェロー）

1972-1973 年、野外民族博物館リトルワールド、
「グリーンランド・エスキモーの民族誌的資料収集と調査」の背景と意義

日 下　稜

1. はじめに

1972 年、野外民族博物館リトルワールドの開館を前に大島育雄（本稿「3. 」で後述）が「グリーンランド・エスキモーの民族誌的資料収集と調査」を目的としてグリーンランド、シオラパルクへ派遣された。資料の一部は現在も博物館に展示されているが、その他、収集の際に大島が書き残した未発表の日記や書簡、調査ノート、写真等が、リトルワールド及び大島の手元に残されていることが分かった。これらの資料と本人への聞き取りを基に収集の背景を探り、コレクションの意義を考察した。

2. 時代背景とリトルワールド構想

1970 年に大阪府吹田市にて日本万国博覧会（大阪万博）が開催され、その際に作られたパビリオンを、愛知県犬山市に開館する予定のリトルワールドに移築する構想が持ち上がった。しかし、以下の理由により、万博のパビリオンではなく世界各地の実際の建物を移築する「人間博物館」のコンセプトが決定されたことが「名古屋鉄道百年史」に記されている。「（万博のパビリオンは）これらはほとんど超近代的な建築で各国の伝統的文化を現すものではないので採用されなかった。そこで人間博物館という新しい方向が考え出され、世界の各地で諸民族が作り上げた個性豊かな文化を再現する施設を建設しようとの基本構想が決定した」（名古屋鉄道株式会社 1994：516）。

大島やリトルワールドの宮里孝生主任学芸員によると、開館前のリトルワールドでは、目玉となる展示の収集のため各地に人を派遣しており、そのひとりが大島だったという。当時の日本ではグリーンランドをはじめとするエスキモーに関する資料は、ほとんど無く、その暮らしの様子は全く知られていなかった。当時の中学校の社会科の教科書では、北極と南極が「両極地」と 1 つの節にまとめられ、そこに暮らす人々に関する記述は以下の 2 文のみである。

・原住民は、ユーラシア大陸にラップ、北アメリカ大陸にエスキモーが住んでいるが少数にすぎない。
・寒さが厳しく農耕がほとんどできないので、これまでは、あざらしなどの狩猟やとなかいの遊牧などで生活してきた。しかし今では、建設事業や漁業・林業の労働者として働いているものが多い（能登ほか 1971：279）。

「グリーンランド・エスキモーの民族誌的資料収集と調査」の計画書にも以下の記述があり、当時の日本における資料の少なさと、収集の意義を強調している。

・グリーンランドにおいても、原住民であるエスキモーの社会変化は著しく、かつての独特な極北狩猟民としての文化は、この 20～30 年間で、急速に失われつつある。一方、我が国では、グリーンランド・エスキモーに関する資料は皆無で、その文化については、ほとんど知られていない。

また、計画書には「この地方のエスキモー文化は、地球上で最も北に住む人間の生活を示すものとして、リトルワールドの中においてもユニークな資料となるばかりでなく、我が国の学界に対しても、貴重な学術資料となるであろう。」との記述もあり、この収集に学問的な意義も見出していることが伺える。

3. リトルワールドと大島育雄

東京大学文化人類学研究室の大貫良夫（現リトルワールド館長）と鹿野勝彦（リトルワールド研究員、現金沢大学名誉教授）がグリーンランドでの民具収集を企画した。鹿野は日本山岳会エベレスト登山隊（1970 年に日本人として初めて松浦輝夫と植村直己がエベレストに登頂）で同じ隊員であった嵯峨野宏（日本大学山岳部 OB）から大島育雄（同じく日本大学山岳部 OB で嵯峨野の後輩）を紹介されたことからこの調査が実現した。日大山岳部は、大島がシオラパルクへ入る以前にも人ひきソリによりグリーンランド横断を行っていることから多少の知見があった。また大島自身グリーンランド行きを望んでいたこともあり民具収集を任されることとなった。この調査を行うにあたり、研究者ではない

大島が選ばれたことに関して、企画書に以下のような記述がある。「グリーンランドは、その特殊な自然条件のために、長期滞在して、住民の生活を調査し、資料を収集することは、極めて困難である。専門研究者である前に、氷雪の中の生活や旅行の基本的な技術や適応性が必要とされる。特に今回の収集調査の対象地であるチューレは、人類生息の最北限であり、その自然条件は極度に厳しいものである」。日大山岳部は当時から盛んに冬山登山や海外遠征なども行っており、大島も山岳部での経験が買われたといえる。

4. 収集した民具と当調査の意義

大島が収集及び記録しリトルワールドが所蔵している資料は以下のとおりである。
民具（毛皮の衣類，皮鞣し道具，銛，ナイフ，カヤック，犬橇，置物等）：164 点
リバーサル写真（マウント）：1,044 点、写真撮影メモ：21 枚、大貫良夫氏（収集の依頼者，現リトルワールド館長）への書簡：6 通、計画書：7 ページ、調査メモ：4 枚

このうち、民具約 60 点はリトルワールド本館展示室にて公開されている。収集品には、現在では入手が困難な海獣の骨製のナイフやソリのランナー、クジラの腱の糸、石のランプ、アザラシの革を張ったカヤックなど貴重な民具も含まれている。このことから当調査は学術的な意義のみだけではなく、一般に広くグリーンランドの暮らしに関する知識を広げる役割を果たしたと言える。また、大島がグリーンランドに住んで以降、日本語で書かれたグリーンランドに関する書籍のほとんどが、本人もしくは大島にお世話になった人により執筆されたものであることからも、この調査が日本人のグリーンランドに関する知識と興味に多大な影響を与えたといえる。著者が 2023 年に大島を訪ねた際に、1972 年当時の調査ノートを譲り受けた。これらの資料を精査することにより、当時の暮らしの様子がより詳細になることを期待したい。

引用文献

名古屋鉄道株式会社
1994　『名古屋鉄道百年史』名古屋鉄道株式会社、名古屋.
能登志雄、田辺健一、矢沢大二、佐藤久
1971　『中学社会科　地理』株式会社帝国書院、東京.

（くさか・りょう／北海道大学低温科学研究所）

アイヌ神謡における折節と本文の音楽的関係

長 尾　優 花

本発表では、折節と本文のリズム型についての先行研究の観察・分析が当てはまらない資料について、それらを統一的に説明する仮説を提示し、さらにその仮説も当てはまらないようなものについて、分析方法を考察した。

近藤（1962：7）、甲地（2022：16）の観察によると、折節の最後の 2 音節と本文最後の 2 音節が同じリズム型になるという。

一方でその分析が当てはまらないものもある。そのような例として、二つを挙げた。筆者の観察では、田村（1988）に収録されている神謡「雀の酒盛り」は、折節 hancikiki の最後の 2 音節と本文最後の 2 音節が同じリズム型ではなかった。萱野（1998）に収録されている神謡「怪鳥フリと白ギツネ」も同様に、折節 howewe pahum の最後の 2 音節と本文最後の 2 音節が同じリズム型ではない。

この二つの神謡は、たしかに「折節の最後の 2 音節」を見ると、本文最後の 2 音節とはリズム型が一致していない。一方で、「折節の最後の 2 拍」と「本文最後の 2 拍」を観察してみると、リズム型が一致している。

「雀の酒盛り」の本文のリズム型は 1 音節 1 拍を基本としている。折節 hancikiki は、最後の ki が 2 音節分の長さで発音されるか、1 音節分の長さで発音し、もう 1 音節分のポーズ（間、休符）が入っているように聞こえる。これは、この ki を歌う際、歌い手はこの ki の中に 2 拍分の意識を持っていることを示すのではないだろうか。甲地（2006：13）は、小泉（1990：29-35）を引用し、この折節の最後には「解放点」「段落感」があると指摘している。小泉（1990：30）は「解放点」を安定させるためには行の最後に 1 拍分の発音に加えもう 1 拍分の休符が必要だと指摘している。また、最後の発音が 2 拍分の長さだったとしてもそこに解放点があると述べている。この解放点についての説明は、たしかにこの折節にも当てはまる。最後の ki を 2 拍分の長さで歌っているという観察は、解放点の説明と一致する。よって、神謡の歌い手が ki という 1 音節の中に 2 拍分の意識を持って歌っていると仮定する。本文は 1 音節 1 拍が基本であるから、本文最後の 2 拍は「♩♩」というリズム型である。折節の最後の 2 拍「ki」も同様に、「♩♩」というリズム型である。

howewe pahum については、甲地（2006：17）は解放点のことに言及していないが、こちらも同様に解放点があるように聞こえる。実際に hum の後にポーズが 1 拍分あるように聞こえるため、これも折節の hum を歌う際に歌い手は 2 拍分の意識を持っていると考えられる。なお、甲地（2006：13）は解放点がある場合は、折節が本文の後ろに挿入されると考えられると述べている。本発表では、あくまで折節のリズムの形に着目しているため、折節の挿入位置については検討しなかった。

先行研究の分析では、折節の最後の 2 音節と本文最後の 2 音節のリズム型が一致するということがわかっていた。音節ではなく拍に注目することで、より統一的に折節と本文のリズム型を説明することができるだろう。

次に、今述べた仮説が一見当てはまらない神謡について、その分析方法を提示した。本発表では、片山（1995）「火の神のカムイユカラ」の折節 ateyateyatenna tenna について三つの分析方法を提示した。

まず、折節が 2 拍子、本文が 3 拍子で歌われていると考えるという方法である（以下、分析方法①とする）。折節 2 回目の tenna、つまり折節最後の 2 拍と本文最後の 2 拍のリズムの形が一致している。一見すると、先に提示した先行研究を一般化した仮説に当てはまる。しかし、折節を 2 拍子、本文を 3 拍子として観察しているため、折節の拍子と本文の拍子が異なる。その場合の後ろの 2 拍はそれぞれ本質的に同じものだとは言えない。そのため、なぜ後ろの 2 拍が同じリズム型になるのか、説明が難しい。

次に、折節を 3 拍子、本文を 3 拍子として考える方法を挙げた(以下、分析方法②)。こ

れは折節も本文も同じ拍子として数えている。そのため、折節最後の 2 拍と本文最後の 2 拍が同じリズム型だと言える。分析方法②は分析方法①の課題を克服しているように見えるが、この分析方法は破綻している。なぜなら、まず、筆者にはこの折節は 2 拍子に聞こえるため、3 拍子として聞くには無理があるように思う。また、折節と本文の拍子が異なるものはこの神謡以外にも多く存在するため、それらの拍子の違いをも考慮しないことになる。この分析方法は神謡の音楽的要素についての観察を諦めることにもつながる恐れがあるため、支持することができない。

三つ目に提示したのは、コアとなるリズム型が折節の最後に必ずしも存在するわけではないという考え方である（以下、分析方法③）。ateyateyatenna tenna のうち、本文のリズム型と一致している真ん中の teyatenna が、リズム型のコアとなっていると仮定する。このコアを基準に、前の ateya と後ろの tenna が挿入されたのではないだろうか。先行研究と筆者が先に挙げた仮説では、「折節や本文の後ろ」に注目する。そのため、分析方法①を適用すると折節と本文の拍子が異なるため、実質的に同じリズムだとは言えない。一方で、分析方法③では、折節や本文のどの拍にコアとなるリズム型があるかは決まっていないと考える。そのため、折節と本文の拍子が異なっている場合でも同じリズム型を見出すことができる。

この論を検証するために、国立国語研究所（以下、国研）のアイヌ語コーパス「火の女神が魔神と戦った」に挿入される類似の折節を分析した。

この神謡には三つの折節が挿入されており、一つ目は apemerumeru koyankoyan mat（以下、折節①）、二つ目は ateyatenna（以下、折節②）、三つ目は apemerumeru（以下、折節③）である。片山（1995）とリズム型を比較するため、本発表では、折節②ateyatenna に注目した。なお、折節①と折節③が独立して出てくる場合のリズムについては、今後の研究課題とし、今回の発表では検討しなかった。

この神謡は、折節②の teyatenna のリズム型「♫♩♩」がリズム型のコアとして存在しており、それが本文のリズム型「♫♩♩」を規定しているとして無理なく説明できる。折節①は折節②の前に挿入されることが多いため、折節②の部分を基軸としてその前に折節①がついたと仮定する。

この分析によって、折節にはコアとなるリズム型をもつものが存在し、その前後に言葉がつけたされ新たな折節のバリエーションが作られるという仮説が提示できる。

この仮説をもとに片山（1995）を検討すると、以下のことが言える。片山（1995）の折節は、国研の折節②teyatenna のリズム型をコアとして前後に言葉がつけたされたバリエーションの一つであるということである。つまり、ateyateyatenna tenna の真ん中の teyatenna のリズム型をコアとし、前に ateya、後ろに tenna がつけたされた。ただし、この論は先行研究とも筆者が先に提示した仮説とも大きく異なる論であるため、今後も慎重に検討していく必要がある。

引用文献

片山龍峯（編）
1995『カムイユカラ』片山言語文化研究所、東京.

萱野茂
1998 『萱野茂のアイヌ神話集成 1 カムイユカラ編 I 』ビクターエンタテインメント株式会社、東京.
小泉文夫
1990 「日本のリズム」櫻井哲男（編）『民族とリズム』東京書籍、東京、17-40.
（初出 1969 芸能史研究会（編）『日本の古典芸能 1 神楽編』平凡社、東京.）
甲地利恵
2006 「沙流川流域に伝わるアイヌの「神謡」の音楽について （1）概説 （2）拍節構造」『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』、札幌、(12):1-42.
2022 「神謡の旋律型とその分類方法に関するノート—折返し句の旋律と物語本文の旋律との関係性について—」『北海道博物館アイヌ民族文化研究センター研究紀要』、札幌、(7): 9-40.
近藤鏡二郎
1962 「アイヌのユーカラ—沙流地方の伝承を主として—」『アイヌのユーカラ：沙流地方の伝承』音楽之友社、東京、p.5-12.
（初出 1961 音楽学会（編）『音楽学』音楽之友社、東京、7(1):13-19.）
田村すず子
1988 『アイヌ語音声資料 5』早稲田大学語学教育研究所、東京、84-87.

（ながお・ゆうか／北海道大学大学院文学院修士課程）